

歩行訓練における地図習得のプロセス

——視覚障害者歩行訓練のエスノメソドロジー——

吉村 雅樹・秋谷 直矩・佐藤 貴宣

本論の関心は歩行訓練のなかで知識が実践的で応用力に富む地図に変化するプロセスを見いだすことにある。歩行訓練はその代表的教科書である *Foundations of Orientations and Mobility* の題名に示されているとおり、視覚障害者が歩行訓練を通して定位と移動に習熟することにある。視覚障害者が生活のなかで単独で自由に移動するということは変化する環境状態と切り離せず、環境との親密化（ファミリアリゼーション）が重要であるとされる¹。変化する環境状態においても定位と移動をするために、歩行訓練において指導員が地図に関する知識をどのように伝達し、障害者がその知識をどのように獲得しているのかを訓練中の会話や身振り行為を分析することによって明らかにする。

1 はじめに

本論の分析の枠組みと歩行訓練の先行研究における地図情報と基礎情報について整理する。

1-1 歩行訓練について

歩行訓練（Orientation and Mobility）は視覚障害者の社会適応訓練（生活訓練）の一つとされている。社会適応訓練は「視覚機能に何らかの損傷を受けた人たちに対して、過去の学習してきた経験や残存諸感覚機能を効果的に利用し、また補助具を活用して、身辺自立から生活自立に欠かせない移動技能、コミュニケーション技能、日常生活技術、レクリエーション技能、視覚障害者が生活するために必要な知識などを獲得できるようにし、そのプロセスは、視覚障害という欠損部分を代償的な行動に置き換え精神的にも行動的にも視覚障害が発生する以前の生

活を獲得できるように総合的に指導・訓練する体系である。」（坂本 2007）と定義されている。歩行訓練は仕事や生活において通勤や通学の線的な経路の安全な移動をすること、あるいは、家屋内や買い物、散策などの平面的・立体的なエリア内の自由な移動をすることを目的として現地や擬似的な場所で行われる。生活訓練担当者がそれぞれの障害者の要望と能力に合ったプログラムを立案し、歩行訓練士²が指導を行っている³。

また、これは視覚障害者のファミリアリゼーションの一つであるとされる（芝田 2012）。ファミリアリゼーションとは視覚障害者が環境について「未知状態である場合に活動能力はおおきな制限を受ける」（芝田 2011）ので、その「未知状態にある事物、場所、地域等を触覚的聴覚的等さまざまな手がかりを用いて言語的、行動的に解説し、『よく理解している状態（既知状態）』にすること」（芝田 2012）だとされている。

ここでは、環境について未知状態から既知状態になるほど、活動能力は制限を受けないと述べられている。

しかし、人は環境の中を自分自身が移動する際には苦勞しないので、道を知っているつもりでも、その場所の位置や道順を他者に説明する際には苦勞をすることがある。環境の手がかりを用いて解説できることが、環境を『よく理解している状態（既知状態）』だと考えてよいのだろうか。また、既知状態になることと活動できることの正の相関関係とはどういうことなのかについても改めて整理する必要があるのではないだろうか。

1-2 歩行訓練における経験と情報

視覚障害・リハビリ研究における歩行訓練についての先行研究では、人の目的地への移動に必要なとされる情報には大きく地図情報と基礎情報の二種類の情報に分類できる可能性があるとしている。

一つは現在地と目的地を含む空間の構造に関する情報であり、もう一つは時々刻々と変化する環境についての情報である。前者は、現在地から目的地までのルートや、現在地と目的地を含む空間構造などに関する、いわば静的情報であり、対象化による環境認知に関わる部分である。一方後者は、まっすぐ歩くとか、交差点を発見するとか、信号機の色を知るなどの、歩行者と環境との相互作用の結果として、歩行中に利用される情報であり、人間の移動に応じて変化する情報であり、原寸大の環境認知に関わる部分である。前者の情報は従来の地図に多く含まれているので、この論文では、それを地図情報と呼ぶことにする。また、第2の種類情報は目的地まで

の移動の基礎になる情報なので、それを基礎情報と呼ぶことにする。(山本・芝田・増井 1994; 12)

これは、地図情報は地図面での表示のような客観的な事物配置の情報であり、基礎情報は当事者が刻々と知覚する主観的な事物配置の情報であるという区分に対応している。しかし、空間構造に関する静的情報はたとえ地図情報であっても、人間によって知覚されるという意味では、人それぞれの自身の知覚経験に由来し、これに帰属している主観的な知識である。人は眼前の事物についての自身の知覚経験から、多くの場合には自分の目前に事物が存在していることをごく自然に信じる。しかし同時に、それが主観的だと知っているから、場合によってはそれを疑い、稀にはそれを否定することすらできる⁴。客観的な特定の存在として信じたり、疑って括弧つきの存在としたり、存在を否定したりするという認識のための諸活動を人は行っているといえる。他方「原寸大の環境認知に関わる部分」である基礎情報もまた、客観的な空間の諸事物や構造に関するものであるという意味では、純粋に主観的なものではなく、環境の客観的なあり方と結合している。

客観的な事物情報としての地図情報と、主観的な認識による事物情報としての基礎情報という情報の区分には、歩行訓練では、一方で地図のような事物世界の情報を利用しながら、他方で直接的な知覚的な事物世界の情報をやりとりしていることが反映されているように思われる。しかし、重要なことは情報を区分することよりも、むしろ歩行訓練では何よりも、実際に歩行することを基本にして、生身の身体が環境のなかを運動しながら移動し、事物や街路や外気に触れ、同時にそれらを広がりの中かで聴く

という統合的な知覚経験をしているということだと考えるべきではないだろうか。歩行訓練は情報を得ることよりも、まずは知覚経験することを基本にした諸活動だと考えられる。

ただし、さまざまな経験がただ重ねられただけでは自覚的な環境認識としての地図になるわけではないだろう。歩行訓練では歩行訓練士と視覚障害者の双方が、生身の知覚経験を基本として、双方がやりとり可能な経験にかかわる知識として、それらを歩行の進行と身体運動、会話や身振り、また、それにとともなう周囲環境の変化などと関連づけをしながら組織化していると考えられる。地図情報と基礎情報という区分は、やりとりする情報を臨機応変に客観性や主観性の色付けをすることで、その表出と理解を容易にするだろう。しかし、視覚障害者が生活において単独で自由に移動できるようになる達成水準が高いほど、そして、環境をよりよく理解している既知状態であるほど、表出と理解の方策である地図情報と基礎知識の区分はなくなって、歩行移動の実践で利用可能な本人の経験もしくは記憶そのものになってゆくだろうと思われる。

そこで地図を習得するプロセスを知るには、地図情報と基礎情報という区分を離れて、そして、環境について未知であることや既知であることの知識状態の区分をすることからも離れて、やりとりと経験に関わる諸活動へと遡る必要があると考える。そこで、本論では歩行訓練における会話や身振りのなかで主題化されている経験にかかわる知識を詳細に見ることで、経験に関わる諸活動そのものの分析的な推測を行う。

1-3 本論の分析の枠組み

歩行訓練場面での行為を分析する方法とし

て、本論ではエスノメソドロロジー⁵による会話分析と作業研究⁶を基にした分析を採用する。実際の訓練場面のビデオデータから、会話場面の発話行為だけではなく観察可能な動作も身振り行為として分析する。我々は経験そのものを直接的に観察することはできない。しかし、歩行訓練における発話行為や身振り行為に表出され、そこで主題化されている知識や経験を推測することはできる。エスノメソドロロジーでは会話や身振り行為を連鎖的なものであるという観点で考える。行為者の意図の分析をするのではなく、行為の空間的、時間的な連鎖的变化を分析することによって、場面全体で生じている秩序性を描き出すことが重要だと考える。

なお、エスノメソドロロジー・会話分析研究では、近年「相互行為と移動」をテーマにした論文や論集が刊行されるなど、本論に関連する研究が蓄積されてきており（Hester and Francis 2003; Haddington et al. 2013）、それらのいくつかは本論の直接的な先行研究となる。なかでも、シェグロフ（1972）の人びとのやりとりにおける場所同定に関する議論を発展的に展開させたサーサスの研究（Psathas and Kozloff 1976; Psathas 1986, 1990）は本論にもっとも関連のある先行研究である。サーサスは当該トピックにおいて、移動における「道案内」や「場所の同定」に関するエスノメソドロロジー研究の草分けである。とりわけ、サーサス（1992）では、晴眼者と視覚障害者のやり取りを扱っている。ここでは「教示をする」実践の形式的特徴を明らかにすることが主眼となっている。しかし、視覚障害者が環境の知識をどのようにして知るのが直接的に検討されているわけではない。そこで、視覚障害者と晴眼者でもある歩行訓練士の両者による環境についての知識と経験の関連づけとして解明することを基本にして、視覚障

害者がどのようにして地図を習得するかという問いについて取り組む。

2 歩行訓練における知識と経験の変化プロセス

本章では歩行訓練において歩行訓練士と視覚障害者の会話や身振りを通じてのやりとりにおける経験に関わる知識が変化するプロセスとして“知識を提示する”、“経験を重ねる”、“知識を呼び戻す”という活動の定型があることを示す。これらの諸活動では多くの知識や経験が主題化されており、また、それらが秩序をもって関連づけられていくことを示す。歩行訓練士と視覚障害者が相互的にそれらを関連づけて豊かなものに行っていることを明らかにする。

2-1 歩行訓練における諸活動

断片1では歩行訓練士A（以下、OMS: Orientation and Mobility Specialist）⁷とほぼ全盲の視覚障害者B（以下、VIP: Visually Impaired Person）⁸の両者がともに目前にある同じ事物に注意を向けながら近づいてゆく場面を取り上げる。OMSは実務10年のベテランである。この歩行訓練の目的はVIPが通勤のために地下鉄

を利用して勤務先まで安全に往復移動するためであるが、取り上げるのは地上での線的な径路を歩行する一場面である。

両者は京都市営地下鉄くいな橋駅の地上出口（図1左図の左下の建物）から屋外に出て街路の歩道にむかって大きく左回りの連絡路上を歩いてきた。VIPは白杖を使って歩行している。VIP（図1右図の右人物）の左後方をOMS（図1右図の左人物）がVIPに触れずに歩いている。残りわずか1.5mほど先で直交する歩道に到達するというときに、OMSがVIPに鉄板（側溝鉄蓋）と歩道が目前にあると説明をする。そのあと間もなく、両名はその鉄板と歩道がある地点に到達する。

19行目の時点で二人は図1で示すように路上の側溝鉄蓋に近づきつつある。19行目のOMSによる「もうちょっと行くと鉄板越えたら歩道に出ます」という発話は、OMSがまもなくVIPが経験するであろうことを予告するものとして理解できる。やりとりのなかで主題となる知識を選択的に相手に向けて表出することをここでは“知識を提示する”活動とよぶことにしたい。

ここでOMSは、OMSとVIPとの視知覚経験の差異から主題となる有意義な知識を取り上げ

表1 断片1：目前の鉄板と歩道へむかう会話^{9,10}

- 19.OMS: はい、で、もうちょっと行くと鉄板越えたら歩道に
出[ま[す]
20.VIP: [《白杖の先が側溝鉄蓋の表面に触れる金属音》
21.VIP: [はい
22.OMS: これです[ね
23.VIP: [《右足が側溝鉄蓋の上に乗る》
24.VIP: はいはい、あ、これ[です[ね
《側溝鉄蓋手前の停止ブロックに後退して、白杖で歩道と鉄蓋を突く》
25.OMS: [で、右側
26.VIP: 《小さい歩幅で側溝鉄蓋上を右前へ》《歩道に踏み入る》
27.OMS: .これは歩道です。歩道上
28.VIP: 《右へ体向して歩道上にいる》



図1 連絡路に直行する鉄板と歩道¹¹

地図データ@ 2016 Google, ZENRIN

ている。ここで取り上げられているのは OMS には視知覚経験で予測できているが、しかし VIP はまだ知覚経験をしていないが、これから知覚経験をすることになるということである。「もうちょっと行くと鉄板越えたら歩道に出ます」という発話には {鉄板がある} と {歩道がある} という目の事物存在についての知識だけでなく、VIP の周囲状況が進行しつつあることも主題になっている。これは {いま目の前の鉄板に近づきつつある} ことと {その鉄板を越えたら歩道にでる} ことを VIP に向けて予告していると解釈することができる。すると、19 行目での行為、主題化している知識、そして OMS による“知識を提示する”活動としてま

とめると以下の表 1 A のようになる。提示された知識には (P : Proposal) を付して表す。

この OMS の発話の終了間際、20 行目で VIP の白杖が側溝鉄蓋の表面に触れてカンという金属音を生じさせている。VIP の身体より前方にある白杖の先が金属 (側溝鉄蓋) に触れたために、音とその感触が生じている。OMS から知識が提示された直後のタイミングの適切さによって、VIP はこれが {近づきつつある鉄板} であると推測できたであろう。このことは、OMS が提示した知識 {P1: いま目の前の鉄板に近づきつつある} {P2: その鉄板を越えたら歩道にでる} に、白杖が触れたことによる金属 (側溝鉄蓋) についての VIP 自身の聴触覚経験を重

表 1 A 断片 1 : 19 行目における行為、知識、活動

- OMS の発話行為 :
「もうちょっと行くと鉄板越えたら歩道に出ます」
- 主題化している知識 :
{P1: いま目の前の鉄板に近づきつつある} {P2: その鉄板を越えたら歩道にでる}
- OMS による“知識を提示する”活動 :
{P1: いま目の前に鉄板に近づきつつある} {P2: その鉄板を越えたら歩道にでる}

ねているといえるだろう。VIPが「もうちょっといくと鉄板」として聞いていた予告的な知識に、ここで自身の聴触覚経験 {ここに金属 (側溝鉄蓋) がある} を関連づけしたであろうことが観察できる。

OMSから提示された知識にVIP自身の知覚経験が重なって、知識が関連づけられていることを本論では記号 \approx^2 で表すことにしよう。また、知識に自身の知覚経験を重ねて関連づけることを本論では“経験を重ねる”活動とよぶことにしたい。20行目の行為、経験、そして“経験を重ねる”活動をまとめると以下の表1Bのようになる。重ねられた経験は (E: Experience) を付して表す。

21行目のVIPによる「はい」は、19行目のOMSの発話の終了に合わせて発話されているので、聞き手としての了解を表している発話だろう。

22行目でOMSは「これですね」という発話を、23行目のVIPが側溝鉄蓋を踏もうとする瞬間に合わせて終わらせている。このタイミン

グによって、VIP自身がこれから踏もうとする事物へとVIPが注意を向けることを促していると理解してよいだろう。ここで、OMSが主題化している知識は {VIP (あなた) はこれから鉄板を踏んで知覚する} という予告だと聞ける。「これですね」という発話の「これ」が指すものは、先に {P1: いま目の鉄板に近づきつつある} {P2: その鉄板を越えたら歩道にでる} で示していた {鉄板} であるということも表している。

このように、先に提示されている知識に、後から改めて主題化した知識を関連づけることを本論では“知識の呼び戻し”活動とよぶことにしたい。ここでも、知識が関連づけられることを記号 \approx で表すことにしよう。22行目の行為、知識、そして“知識の呼び戻し”活動をまとめると以下の表1Cのようになる。重ねられた知識にはP'を付して、先に提示された知識Pと関連づけられたものであることを表す。

しかし、この「これですね」という発話が終了しようとするとき、23行目でVIPの右足は

表1B 断片1: 20行目における行為、経験、活動

- VIPの身振り行為:
《白杖の先が側溝鉄蓋の表面に触れる》
- 主題化している経験:
{E1: 白杖の先に金属 (側溝鉄蓋) がある}
- VIPによる“経験を重ねる”活動:
{E1: 白杖の先に金属 (側溝鉄蓋) がある}
- ≈ 【{P1: いま目の鉄板に近づきつつある} {P2: その鉄板を越えたら歩道にでる}】

表1C 断片1: 22行目における行為、知識、活動

- OMSの発話行為:
「これですね」
- 主題化している知識:
{P1': VIP (あなた) はこれから鉄板を踏んで知覚する}
- OMSによる“知識を呼び戻す”活動:
{P1': VIP はこれから鉄板を踏んで知覚する}
- ≈ 【{E1: 白杖の先に金属 (側溝鉄蓋) がある}
- ≈ {P1: いま目の鉄板に近づきつつある} {P2: その鉄板を越えたら歩道にでる}】

まだ着地して側溝鉄蓋の上を踏んだばかりである。VIPが触れ聴くなどの知覚経験としては、先だって経験した白杖が触れる瞬間的な金属音と触感覚だけでは不十分だっただろう。「これですね」という発話が終了しようとするとき、VIPは側溝鉄蓋をまだ十分に知覚経験をできていないように見える。

24行目でVIPは「はいはい」に続けて「あ、これですね」と軽い驚きを含ませた発話をしている。この発話の前の短時間の素早い身振りだが、「はいはい」の発話直前にVIPは白杖を素早く垂直に持ち替えている。そして、いったん両足が乗った側溝鉄蓋から僅か半足長ほどを擦り足気味で後ずさりしながら「はいはい」と発話し、同時に白杖を真上から落とすように突いて、つま先前の歩道を数回と側溝鉄蓋をより素早く数回の打音を生じさせている。ここで、側溝鉄蓋の打音が聞こえるときに「あ、これですね」と発話をしている。

この一連の身振りは、極めて短時間なのだが、VIPが側溝鉄蓋を意図的に特定して知覚経

験しようとしていることを表している。そして、歩道を突く音から、僅かだが歩道の知覚経験もできていることがわかる。後ずさりしてでも、側溝鉄蓋の存在を白杖で確認するVIPの入念さが見える。22行目でOMSが主題化した予告情報 {P1':VIPがこれから鉄板を踏んで知覚する} について、VIP自身が入念にこれを実行して、{歩道、そして側溝鉄蓋を十分に知覚経験する} という経験を重ねていると考えてよいだろう。

そして同時に、「あ、これですね」という発話によって、VIP自身が {この側溝鉄蓋が鉄板である} {鉄板の先に歩道がある} も認識したことが表されているように見える。この発話によって主題化されている知識は {この側溝鉄蓋が鉄板である} {鉄板の先に歩道がある} であり、これは、19行目で先に提示されていた知識 {P1:いま目の前の鉄板に近づきつつある} を呼び戻して改めて関連づけることになっている。この24行目での行為、経験、知識、そして“経験を重ねる”活動と“知識を呼び戻す”活動をま

表1D 断片1：24行目における行為、経験、知識、活動

- VIPの身振り行為と発話：
 - 《側溝鉄蓋手前の停止ブロックに後退して、白杖で鉄蓋を突く》
 - 「はいはい、あ、これですね」
- 主題化している経験と知識：
 - {E1':歩道、そして側溝鉄蓋を十分に知覚経験する}
 - {P1'':この側溝鉄蓋が鉄板である} {P2':鉄板の先に歩道がある}
- VIPによる“経験を重ねる”活動：
 - {E1':歩道、そして側溝鉄蓋を十分に知覚経験する}
 - ≈【{P1':VIPはこれから鉄板を踏んで知覚する}
 - ≈ {E1:白杖の先に金属(側溝鉄蓋)がある}
 - ≈ {P1:いま目の前の鉄板に近づきつつある} {P2:その鉄板を越えたら歩道になる}】
- VIPによる“知識を呼び戻す”活動：
 - {P1'':この側溝鉄蓋は鉄板である} {P2':鉄板の先に歩道がある}
 - ≈【{E1':歩道、そして側溝鉄蓋を十分に知覚経験する}
 - ≈ {P1':VIPはこれから鉄板を踏んで知覚する}
 - ≈ {E1:白杖の先に金属(側溝鉄蓋)がある}
 - ≈ {P1:いま目の前の鉄板に近づきつつある} {P2:その鉄板を越えたら歩道になる}】

とめると表1Dのようになる。重ねられた経験と知識には'E'と'P'を付して表す。

次の25行目のOMSの発話冒頭の「で、」は、先の主題の会話を完了して、次に新たな話題を開始する前置きになっている。そして、「右側です」という発話で「歩道を右側に行こう」という新しい“知識を提示する”活動をしている。これをまとめると以下の表1Eのようになる。

直後の26行目でVIPはOMSが提示したとおりに体をやや右斜めにむけて前進を始める。そして直ぐに、側溝鉄蓋を越えて歩道に踏み入っている。これらを、VIP自身の行為、経験、

そして“経験を重ねる”活動としてまとめると以下の表1Fのようになる。

27行目のOMSの「これは歩道です、歩道上」という発話は、{VIP(あなた)はすでに歩道上にいる}ということを表している。これは、先にOMSが提示していた知識{P2:その鉄板を越えたら歩道にでる}を、早々にVIPが達成したことを表している。この発話は先に提示されていた知識への関連づけをする“知識を呼び戻す”活動になっている。27行目の行為、知識、そして“知識を呼び戻す”活動をまとめると以下の表1Gのようになる。

表1E 断片1：25行目における行為、知識、活動

- OMSの発話行為：
「で、右側です」
- 主題化している知識：
{P3:歩道を右に行こう}
- OMSによる“知識を提示する”活動：
{P3:歩道を右に行こう}

表1F 断片1：26行目における行為、経験、活動

- VIPの行為：
《小さい歩幅で側溝鉄蓋上を右前へ》《歩道に踏み入る》
- 主題化している経験：
{E3:右へ進む} {E2:鉄板を越えた場所に踏み入る}
- VIPによる“経験を重ねる”活動：
{E3:右へ進む}
≈【{P3:歩道を右に行こう}】
- VIPによる“経験を重ねる”活動：
{E2:鉄板を越えた場所に踏み入る}
≈【{P2:その鉄板を越えたら歩道にでる}】

表1G 断片1：27行目における行為、知識、活動

- OMSの発話行為：
「これは歩道です、歩道上」
- 主題化している知識：
{P2':VIP(あなた)はすでに歩道上にいる}
- OMSによる“知識を呼び戻す”活動：
{P2':VIPはすでに歩道上にいる}
≈【{E2:鉄板を越えた場所に踏み入る}】
≈【{P2:その鉄板を越えたら歩道にでる}】

28行目でVIPは歩道上で身体正面を右に向けている。OMSが提示した{P3:歩道を右に行こう}に従ってVIPが右斜めに前進しつづけた結果である。この28行目は先の26行目と同様に“経験を重ねる”活動になっている。これをまとめると以下の表1Hようになる。

断片1の19行目から28行目の出来事を、さまざまな知識と経験のやりとりの記述という方法で以上のように描きだした。ではこの場面全体で生じている秩序とそれによって達成されたことは何なのかを考察したい。

2-2 経験が情報として関連づけられるプロセス

断片1の場面は約8秒間の出来事で、僅か

1.5mほどを五歩ほどで移動するだけの場面である。{鉄板}と{歩道}という地図上の対象物に近づいて、到着するという状況に関わる知識と経験だが、対象物とその配置、視覚、発話、身振り行為、移動、白杖利用、聴覚、触覚、タイミングなどが訓練士と障害者の両者それぞれによる秩序だった主題化によって多くの知識を生じている。それら全ては緊密に関連し合っている。このことを改めて発話場面に対応させて表すと以下の図2になる。

特に注目したいのは、24行目の「あ、これですね」という部分である。ここは、断片1でのOMSによる一つの教示が、VIPが身体で経験した側溝鉄蓋が{鉄板}であるというVIPの認識として達成されて、教示が終

表1H 断片1：28行目における行為、経験、活動

- VIPの行為：
《右に体向して歩道上にいる》
- 主題化している経験：
[{E3:右へ向く}]
- VIPによる“経験を重ねる”活動：
[E3:右へ向く]
≈ [{P3:歩道を右に行こう}]

19.OMS: はい,で,もうちょっと行くと鉄板越えたら歩道にく出[ま[す]

20.VIP: [《白杖の先が側溝鉄蓋に触れる金属音》

21.VIP: [はい

22.OMS: これです[ね

23.VIP: [《右足が側溝鉄蓋の上に乗る》

24.VIP: はいはい,あ,これ[ですね
《側溝鉄蓋手前の停止ブロックに後退して、白杖で歩道と鉄蓋を突く》

25.OMS: [で,右側

26.VIP: 《小さい歩幅で側溝鉄蓋上を右前へ》
《歩道に踏み入る》

27.OMS: .これは歩道です.歩道上

28.VIP: 《右へ体向して歩道上にいる》

提示する: P1, P2
重ねる: E1 ≈ P1, P2
呼び戻す: P1' ≈ [E1 ≈ P1, P2]
呼び戻す: P1'', P2' ≈ [E1' ≈ P1' ≈ E1 ≈ P1, P2]
重ねる: 《E1' ≈ P1' ≈ E1 ≈ P1, P2》
提示する: P3
重ねる: 《E3 ≈ P3》
重ねる: 《E2 ≈ P2》
呼び戻す: P2' ≈ [E2 ≈ P2]
重ねる: 《E3 ≈ P3》

図2 断片1での発話・行為ごとの知識・経験の関連づけ

えられている部分である。この認識の基には (E1≒P1≒E1≒P1,P2) の経験と経験に関わる知識が重ねられており、そしてこれらの重ねられた全体が改めて最初に提示されていた知識 P1 や P2 に関連づけられている。径路上の歩行移動を進行させるなかで、OMS と VIP の両者が表出した経験することに関わる知識が関連づけられ、そのことが {側溝鉄蓋=鉄板} という認識に「あ、これですね」という経験のリアリティを生じさせているように見える。これは、会話や身振りによるやりとりを通じて、歩行の進行や身体運動や周辺環境の推移のなかで実際に経験するというを組織的に構成しているからだと考えられる。歩行訓練は、実際に経験することを基本にして、OMS と VIP の双方が経験や経験にかかわる知識を緊密に関連づけてゆく活動であると考えられる。

歩行訓練において移動できるようになることの達成水準が高いほど、そして、それが環境をよりよく理解している状態だとするならば、知識は地図情報や基礎情報という外的な事物世界の情報ではなく、歩行移動の実践で利用可能な本人の経験のリアリティになると思われる。

3 歩行訓練における視覚に結びついた知識の利用

前章の分析で歩行訓練では経験に関わる知識や経験が変化する定型的な諸活動があることがわかった。この諸活動において、断片 1 の場合には視覚障害者が経験することを歩行訓練士が予告を行うことによって指導の教示が行われていた。しかし、断片 1 の場面を含む訓練全体や、他のさまざまな歩行訓練場面の観察でも、視覚障害者自身が率先してエリアの知識を要請している場面がしばしば見られる。このとき、視覚

障害者が求めているのは自身の経験の予告ではなく、訓練エリアの予備的もしくは周辺のな知識であり、主に晴眼者である歩行訓練士の視覚による知識を求めていることが多いように見える。また、そのような場合、視覚障害者は重ねる経験を歩行訓練士に何の確認をすることなく、自ら率先して実行しているように見える。多くの歩行訓練場面では、断片 1 で見られたような歩行訓練士が率先する教示だけが一方的に連続的に行われているわけではなく、訓練の事例によって程度に違いがあるものの、視覚障害者が率先して知識を要請する場面が多々混在しているように見える。このような、教示の特徴をとみなわない歩行訓練がなぜ混在して行われるのだろうか。また、このような方法での地図の習得はどのようにして可能なのだろうか。

3-1 視覚障害者による視覚の利用

断片 2 は他県から京都ライトハウスでの歩行訓練実習にきている実習生（以下、OMS2）¹³ と視覚障害者（以下、VIP2）¹⁴ とによる歩行訓練の場面¹⁵ である。OMS2 は京都に来て数ヶ月（3-4ヶ月）である。VIP2 は先天性全盲の青年で京都の大学の3年生である。大阪出身だが京都市内で2年間の下宿生活をした後に休学して単身で海外留学していた。今回の訓練は復学して京都市内の新しいアパートでの単身生活を始めたために行っている。

場面は京都市営地下鉄の北大路駅改札口がある地下三階のコンコースフロアである。3週間前に同じく OMS2 と VIP2 による、同じコンコースを通過して地上のショッピングセンター（通称：ビブレ）内と周辺を買い物のために訓練をしていた。今回は同じエリアでの2回目である。

前回に自宅の最寄り駅での訓練を既に終えて

いるので、今回は買い物で往還する場合に必ず通行する訓練エリアの最寄り駅の駅員改札口を起点として始めている。しかし、訓練エリアとしている地下鉄駅コンコース内や地下バスターミナル内にポイントとなる目的地が特定されているわけではない。VIP2 と OMS2 は今回の訓練エリアを「バスターミナルとこら辺」という言い方をしている。また、VIP2 は隣駅近くのアパートまで歩いて帰るときのために、地下バスターミナルから地上に確実に出る径路を一つ覚えておきたいという希望も述べている。この歩行訓練の目的は基本的にはエリア内での自由な移動と、通常時に加えて緊急時にも自宅アパートとの間の往還ができるようになることだと理解してよいだろう。

図3上左図に示したように、待ち合わせをした後に予定の打ち合わせ場所へ移動して、さらに前回通行した経験のある駅員改札口を出たと

ころまで移動している。そして、ここを歩行訓練の開始場所にして南向きに歩き始めている。歩き始める直前に南向きに点字ブロックを直進して途中を右折した先にあるバスターミナルエリアに向かうことを両者は口答と身振りで確認し合っている。しかし、歩き始めて間もなくして、点字ブロックが分岐し右折する場所に到達する前にVIP2 は「この点字ブロックはどこへつながってますか？」という質問をする。質問の後、二人は現在地で停止する。そして、OMS2 は点字ブロックの直進方向の前方に出口案内の天井サインボードを発見し、遠視でそれを読み聞かせてその質問に答えている。

この後、VIP2 と OMS2 はともに点字ブロックを直進して北大路通り南出口の階段を上って地上に出る。断片2 B は地上の出入口前の歩道上での会話である。

表2A 断片2A：地下3階コンコースフロアでの会話^{16,17}

知識1の提示要請	56.VIP2:こっ点字ブロックはどこへつながってますか?
知識1を提示する	57.OMS2:ブロックね::えと:::もうこのまままっすぐ いってえ:::(0.4)もおんなか.で.れる? 《歩行がゆっくり、そして、停止》
知識2の提示要請	58.VIP2:どこにでる[んですか?
知識2を提示する	59.OMS2: [えとね::北大路通り南(0.6) てゆうところに出れるんで
経験を重ねる	60.VIP2: さ[っき 61.OMS2: [市バスが停まるころかな 《手提げバッグをもった左手を額の正面に上げる》 62. (0.8)
知識1を呼び戻す	63.OMS2:さっき下りてきたのは(0.3)もうちょっと左 《左腕を額正面から左へ振って、直ぐに右のVIP2を見る》 64. (0.8)
経験を重ねる	65.VIP2: これ.まっすぐ行ってみていい[です? 66.OMS2: [ああいい[ですよ 《両者ともに歩行再開》 67.VIP2: [どおなる.くっhh 68.VIP2: ㄹなんかねもう階段いっぱいありすぎてどこが どこかわからへんㄹ



図3 コンコース内の移動、階段、前方サインボードと地下通路

表2B 断片2B：地上に上がって直ぐ、北大路通り南出入口前の歩道上での会話

- | | |
|----------|--|
| 知識2を呼び戻す | 01.OMS2: ここで/ると:::(0.4)え:と(.)烏丸/北大路の
交差点(0.7)のお(0.4)° えとね° (0.3)南東の/カド,
02. (1.5)
03.VIP2: カドがなんとう(0.4) ああなるほど
04. (0.4)
05.OMS2: みなみのひがし |
| 知識2を呼び戻す | 06.VIP2: これまえが、前が北大路ですか?
07.OMS2: そう、いま指してるほうが:えっと:(0.7)
ビブレがある方
08. (0.7) |
| 知識2を呼び戻す | 09.VIP2: これ渡ったらビブレですよ |

3-2 視覚障害者による知識の提示要請

点字ブロック沿いに南向きに歩き始めて直ぐに、券売機前の人に近づき過ぎるのを避けるために、わずかに左（東）寄り斜めに直進をする。そのときに斜めに長く点字ブロックを踏んで横断している。ここで点字ブロックを踏んだ直後の断片 2 A56 行目で VIP2 は「この点字ブロックはどこへつながってんですか？」という質問の発話をしている。この質問はルート変更の意図ではなく、目的地に向かう径路エリアの周辺の知識を得ようとしたものであろうと推測できる。これを VIP2 による OMS2 への知識の提示要請だとする。

この提示要請の直後、57 行目で OMS2 は「…このまままっすぐ行って」とわざわざ視界にある点字ブロックの伸びをそのまま辿るような表現をしてから、当て推量をするような尻上がりで「…もなんか出れる？」と発話をしている。OMS2 は点字ブロックの直進先が地下通路に伸びている景色（図 3 下図）を自身の正面に見ていたと思われる。問われたものをそのまま視線でなぞっている発話や当て推量する発話、それと「なんか」によって、OMS2 は自身がエリア周辺の地理には自信がないこと、そして、このときに応答に利用できる資源を即興的に自分の視覚的な景色のなかを探しているということを表現している。ここでの、OMS2 による“知識を提示する”活動は 56 行目の VIP2 の知識の提

示要請への受動的な応答として行われている。そして、この応答は VIP2 から要請されたときに正面に見えている景色（図 3 下図）、つまり、点字ブロックの直進先が地下通路に伸びている景色を資源にしたものと考えて間違いないだろう。この 56-57 行目を知識 1 の提示要請とその提示としておく。これをまとめると以下の表 2 C のようになる。

ここで、OMS2 が「も」と発言していることは重要だと思われる。「も」と「出れる」は {ここにも出口がある} ということを表している。今回の訓練の打ち合わせの時に、VIP2 はバスターミナルの地下フロアから確実に地上の北大路通りに出る階段を知っておくことを要望していた。OMS2 は VIP2 が広さのある訓練エリア内に複数の地上への出口があることに関心を持っていることを知っている。だから、VIP2 が関心を持っているであろう出口の一つであることを示す「も」をつけたのであろう。

この次の 58 行目で VIP2 は実際にこの出口へ関心を示している。そして、「どこに出るんですか？」という質問を追加している。これもまた VIP2 による OMS2 への知識を提示する要請となっている。この追加の質問に対して 59 行目で OMS2 は「北大路通り南ってゆうところに出れる」と応答している。「てゆうところ」は自分が何かを読んで答えていることを表そうとしているのだろう。ここでも、“知識を提示す

表 2 C 断片 2 A : 56-57 行目における行為、知識、活動

- VIP2 と OMS2 の発話行為：
VIP2: 「この点字ブロックどこへつながってんですか？」
OMS2: 「このまままっすぐ行っても、なんか出れる」
- 主題化している知識 1 :
【P1:点字ブロックはまっすぐに行ける】 【P2:出口がある】
- OMS2 による“知識を提示する”活動：
【【P1:点字ブロックはまっすぐに行ける】 【P2:出口がある】】

る”活動が58行目のVIP2が率先する知識の提示要請への受動的な応答として行われている。そして、この応答もまた正面に見ている点字ブロックの直進先が地下通路に伸びている景色のなかにある案内サインボード（図3下図と右中図）を資源にしたものである。この56-57行目を知識2の提示要請とその提示としておく。これをまとめると以下の表2Dようになる。

この断片2の56-57行目と58-59行目で、知識1と知識2を提示することは質問—応答—質問—応答の連続した会話の中で行われている。ここではVIP2が率先して主導する質問とそれに対するOMS2の受動的な応答によって“知識を提示する”活動が行われている。VIP2の質問に対するOMS2の応答は自分が正面の視界（図3右下図）のなかに見ている点字ブロックの直進先が地下通路に伸びている景色と結びついた一貫したものだと考えられる。唐突な質問に対してOMS2はこの景色を資源として知識を提示するしかなかったように見える。これは、断片1の歩行訓練で、OMSが率先して提示すべき知識を選択していたことと異なっている。

3-3 見ている景色からの知識の引き出し

60行目でVIP2は「さっき」という短い発話をしている。これは、59行目のOMS2の発話が続いたので、自分の発話を中断させてしまっているのだろう。「さっき」で指している事物

が何なのかは言明されていない。提示された知識から想起した事物だろうと推測することはできる。実は、VIP2は歩行訓練の開始直前に別の友人と二人で地上のラーメン屋で昼食を終えて、待ち合わせ場所（図3左図の右側）へ南側から階段を下って地階フロアに来たと語っていた。従って、この「さっき」はOMS2が提示した知識からVIP2がそのときの過去の経験に関連した事物もしくは出来事を想起したと推測することができる。

断片1の事例ではOMSから提示された知識にVIPが経験を入念に重ねて関連づけていた。このときVIPはOMSが「これですね」で指定した{側溝鉄蓋}を特定して白杖で突いたり摺り足で知覚経験していた。しかし、断片2のこの60行目では、そもそもVIP2が提示要請した知識に対して、さらにVIP2が自身で想起した彼自身の過去の経験を重ねて関連づけをしている。ここでの「さっき」というVIP2の発話は、提示された知識からさらに何かの知識を引き出そうとして、試しに“経験を重ねる”ような探求的な活動になっているように見える。「さっき」が指しているのが何かは不明だが、VIP2はこのことによってOMS2からさらに知識を引き出そうとしているように見える。ひとまず、ここでの「さっき」という発話によって主題化している経験を{さっきの経験}としておこう。これをまとめると以下の表2Eようになる。

表2D 断片2A：58-59行目における行為、知識、活動

- VIP2とOMS2の発話行為：
 - VIP2:「どこにでるんですか？」
 - OMS2:「北大路通り南ってゆうところに出れる」
- 主題化している知識2：
 - {P2:出口がある} {P3:北大路通り南へ出れる}
- OMS2による“知識を提示する”活動
 - 【{P2:出口がある} {P3:北大路通り南へ出れる}】

表 2 E 断片 2 A : 60 行目における行為、経験、活動

- VIP2 の発話行為：
「さっき」
 - 主題化している経験
{E1: さっきの経験}
 - VIP2 による“経験を重ねる”活動
{E1: さっきの経験}
- ≈ [{P1: 点字ブロックをまっすぐにゆける} {P2: 出口がある} {P3: 北大路通り南へ出れる}]

60 行目の VIP2 の「さっき」で途切れた発話に
 応答して、63 行目で OMS2 は「さっき下り
 てきたのは、もうちょっと左」と発話している。
 この 63 行目の発話中も依然として、OMS2 が
 正面の点字ブロックが延びた先の地下通路の方
 向だけを見つづけていることに注目したい。手
 提げバッグをもった左手を額の正面に上げて翳
 すようにしてから、「もうちょっと左」の発話
 に合わせて腕を左に振っている。しかしこの
 間、体向は正面を真南に向けたままで左斜め前
 の階段の方向には向けられていない。また、こ
 の発話の終了直後には体向を変えずに顔だけを
 右にいる VIP2 に向けている (図 3 右上図)。こ
 れは、VIP2 が自分と同じ方向に視線を向けて
 いることを確認することで、同じ視覚経験によ
 る同じ認識があることを知ろうとする振る舞い
 を意図せずにしてしまったように見える。だと
 すると、ここからも、OMS2 が関心を向けつづ
 けているのは正面の点字ブロックの直進先が地
 下通路に延びている景色だと推測できる。

OMS2 が正面の景色に関心を向け続けている
 ことから、OMS2 が「さっき下りてきたのは、
 もうちょっと左」で示そうとしているのは、正
 面に見えている点字ブロックの直進先と地下通
 路の先が、さっき下りてきた階段の方向では
 ないということだと推測できる。つまり、さっ
 きの階段よりも右の方向に延びていることを表
 していると推測される。だとすると、この発話

{点字ブロックをまっすぐいった出口はさっき
 の階段の右になる}に言い換えられる。そして、
 この {点字ブロックをまっすぐいった出口はさ
 っきの階段の右になる} という知識もまた、提
 示されていた知識 {P1: 点字ブロックをまっす
 ぐにゆける} {P2: 出口がある} {P3: 北大路通
 り南へ出れる} などとともに OMS2 が正面に
 見ている景色を資源にした知識である。

OMS2 が 57 行目と 59 行目で提示した知識、
 そしてこの 63 行目の知識も含めて、OMS2 が
 提示したすべての知識は正面に見ている一つの
 景色を資源としている。OMS2 はサインボード
 の右端の文字として読めないバス車のイラスト
 (図 3 右中図) であっても、61 行目で「市
 バスが停まる場所かな?」と発話して、その
 ように解釈できる知識として提示している。こ
 れは、バス車のイラストが点字ブロックの直進
 先が地下通路に延びている景色に結びついてい
 るから、この先にバス停があるという解釈が可
 能なのである。OMS2 にとってすべての知識は
 常に同じ景色に結びついて理解されている。63
 行目の知識 {点字ブロックをまっすぐいった出
 口はさっき下りてきた階段の右になる} もま
 た、提示された知識 {P1: 点字ブロックはまっ
 すぐにゆける} {P2: 出口がある} {P3: 北大路
 通り南へ出れる} とともに正面に見ている景色
 を通じて視覚的に関連づけられている。これを
 まとめると以下の表 2 F のようになる。

表 2F 断片 2A : 63 行目における行為、知識、活動

- OMS2 の発話と行為 :
「さっき下りてきたのは、もうちょっと左」
《手を額の正面に上げてから左へ振る》
- 主題化している知識 :
{P1',P2',P3': 点字ブロックをまっすぐいった出口はさっき下りてきた階段の右になる}
- OMS2 による“知識を呼び戻す”活動
{P1',P2',P3': 点字ブロックをまっすぐいった出口はさっき下りてきた階段の右にある}
≈ 【{E1: さっきの経験}】
≈ {P1: 点字ブロックはまっすぐにゆける} {P2: 出口がある} {P3: 北大路通り南へ出れる}】

3-4 近づき・触れ・聴く景色からの知識の引き出し

64 行目で 0.8 秒の沈黙があり、65 行目で VIP2 が「これ、まっすぐ行ってみていいですか？」と予定ルートを変更する許可を求めている。何故、開始して間もないのに当初の予定ルートを変更する必要があるのだろうか。

ここで、VIP2 は OMS2 のように知識を正面の景色に結びつけて理解しているのではないことに注意しなければならないだろう。VIP2 にとっては 56 行目の点字ブロックの先に関する質問「この点字ブロックどこえつながってんですか？」と 58 行目のこの出口の地上位置に関する質問「どこにでるんですか？」は関連してはいるが探求的な二つの質問であることを考慮する必要があるだろう。VIP2 にとって 63 行目での {P1',P2',P3': 点字ブロックをまっすぐいった出口はさっきの階段の右になる} という OMS2 から引き出した知識は第一の質問「この点字ブロックどこえつながってんですか？」への関連づけの言及として聞けたただろう。つまり、知識 1 については“知識の呼び戻し”活動となっていると考えられる。しかし、第二の質問「どこにでるんですか？」への関連づけの言及としては聞けなかった可能性がある。なぜなら、第二の質問での VIP2 の関心は出口が地上位置の何処へ通じているのかということであ

る。しかし、発話「さっき下りてきたのは、もうちょっと左」を通して、これを {P1',P2',P3': 点字ブロックをまっすぐいった出口はさっきの階段の右になる} という解釈をして、さらに地上位置の何処へという問いとの関連づけとして聞くことは容易ではないだろう。つまり、VIP2 にとっては知識 2 についての“知識の呼び戻し”活動が十分ではないと考えられる。

しかし、同時に VIP2 は OMS2 による一連の応答にある表現を総合的に判断して、晴眼者である OMS2 が知識 1 と知識 2 をともに現状の位置から見えている同じ景色だけから引き出していることも推測できただろう。同時に、VIP2 はこの OMS2 が見ているこの景色を他者の知覚経験内のものに留まるものとして理解できただろう。

このことは、VIP2 にとって、現状の OMS2 の見ている景色から引き出せる知識の限界になっている。64 行目での 0.8 秒の沈黙の後、65 行目で VIP2 は追加的な質問をすることによってではなく、新たに「これまっすぐ行っていいですか？」という提案をしている。これは、正面の点字ブロックの直進先が地下通路に伸びているところへと【実際にまっすぐに行く】ということである。これは、VIP2 による現状の知識の資源となっている景色からの変更を意味している。知識を引き出す資源を OMS2 が見

ている景色の限界を超えて、近づき・触れ・聴く景色へと拡張しているともいえる。65 行目でのこの提案は予定ルートの一時的な変更をともなわざる得ないので、OMS2 へ許可を求めている形での要請となっている。これをまとめると以下の表 2G のようになる。

そして、両者は点字ブロックを直進して北大路通り南出口の階段を上がって地上に出ている。近づき・触れ・聴く景色の経験を経て、断片 2 B の 01-09 行目でその経験が相互的に確認されている。ここで、知識 2 {P2: 北大路通り南へ} {P3: 出口がある} は両者の確認による“知識の呼び戻し”活動によって言及されて関連づけられている。これをまとめると以下の表 2H のようになる。

3-5 知識を引き出す方法の拡張

VIP2 が OMS2 の視覚を利用する方法は、質

問して応答を得ることから始まっている。質問したことへの応答であっても、応答によって知識が提示されただけでは経験のリアリティに結びつかない。断片 1 の場合と同様に、断片 2 においても諸活動によって知識は経験と緊密に関連合っている。断片 2 全体での、知識と経験の関連づけをまとめると以下の図 4 になる。VIP2 は知識 1 と知識 2 を要請し、提示されたそれぞれの知識には 60 行目と 65 行目でそれぞれ異なった“経験を重ねる”活動 (E≈P) が行われることによって、“知識を呼び戻す”活動 (P≈【E≈P】) の場面でさらに知識が引き出されている。

まず、56-57、58-59 行目での VIP2 による知識 1 と知識 2 の提示要請をして、OMS2 はそれに応じて知識を提示している。ここで、VIP2 は OMS2 の視覚を利用した知識を引き出している。そして、次に 60 行目で VIP2 はこの提示さ

表 2G 断片 2A : 65、66 行目における行為、経験、活動

- VIP2 と OMS2 の発話と身振り行為：
VIP2: 「これ、まっすぐ行ってみていいです？」
OMS2: 「ああ、いいですよ」
《両者ともに歩行を再開》
- 主題化している経験：
{E2: 実際にまっすぐに行く}
- VIP2 と OMS2 による“経験を重ねる”活動：
{E2: 実際にまっすぐに行く}
≈ 【{P2: 出口がある} {P3: 北大路通り南へ出れる}】

表 2H 断片 2B : 01-09 行目における行為、知識、活動

- VIP2、OMS2 の発話行為：
「ここ出ると、鳥丸北大路通りの交差点の南東の角」
「これまえが、前が北大路ですか？」
「これ渡ったらビブレですよ」
- 主題化している知識：
{P2'P3': 北大路通りの南東の角の地上に出る、手で指している方にビブレがある}
- VIP2、OMS2 による“知識を呼び戻す”活動：
{P2'P3': 北大路通りの南東の角の地上に出る、手で指している方にビブレがある}
≈ 【{E2: 実際にまっすぐに行く}
≈ {P2: 出口がある} {P3: 北大路通り南へ出れる}】

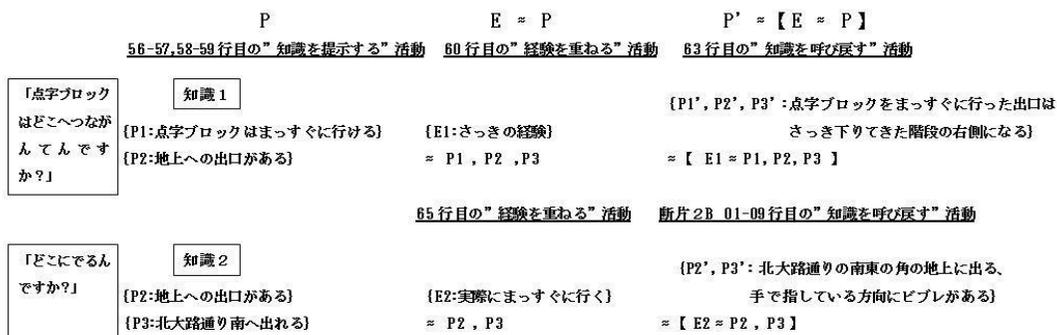


図4 断片2でのVIP2による知識の関連づけ

れた知識に自身の過去の経験を重ねることで、63行目でOMS2からさらに視覚を利用した知識を引き出している。しかしながら、OMS2から引き出された知識がすべて同じ視覚的な景色にだけ結びつけられていることが、VIP2にとっての知識1と知識2の区別を曖昧にしている。これは、この両名が立ち止まった地点からOMS2の視覚だけを利用して知識を引き出すことの限界でもある。このことは、VIP2に近づき・触れ・聴く景色の必要性を生じさせている。また、その実践を促しているともいえるだろう。

そこで、65行目でVIP2はこの地点から見える視覚的な景色から知識を引き出す方法から、この景色に近づき・触れ・聴くことから知識を引き出す方法への変更を行っている。これは関心を向けている景色から知識を引き出す方法を、立ち止まった地点から景色を見るという視覚的な方法の後に、実際に行ってその景色に近づき・触れ・聴く方法を追加しているともいえる。知識を引き出す方法を他者であるOMS2の視覚を利用するだけの方法から、VIP2自身の知覚経験も併せて利用する方法へと拡張しているともいえる。

3-6 日常的な地図の習得プロセスと非日常的な歩行訓練の教示

断片2でVIP2はOMS2の視覚からさまざまな方法で知識を引き出しているといえる。それは、第一には知りたい周辺事物についての直接的なOMS2への質問とそれへの応答による知識である。第二には自身の経験をそれに重ねることによる、視覚的な景色がどのようなものかについての追加的な知識である。そして、第三には、これらの視覚から引き出した知識を基にして、直接的な知覚経験による近づき・触れ・聴くことによって、より詳細で確かな知識を引き出している。

しかし、このような視覚障害者による視覚の利用は歩行訓練で行われる教示としてではなく、むしろ視覚障害者が日常的な生活のなかで身近な晴眼者とともにいることの典型であるように思われる。視覚障害者は日常生活のなかで、生活エリアでの小さな環境変化、移動空間や移動時間の変化や変更などによっても、常にその変化に合わせて日常的に地図を習得し直しているだろう。こうした頻繁な地図の習得し直しを必要とする日常の実生活で、可能な範囲で周囲の晴眼者の視覚を利用することもまた視覚障害者にとってごく自然な日常的なことだ

ろう。だとすると、断片2でのような、何気ない問いかけで始まるやや唐突な地図の習得は、むしろ、友人や家族と一緒に買い物や散策で外出をしているときや、また、単独で移動しているときの偶然の周囲の支援者とのやりとりを通じての、日常的な地図の習得プロセスに似た特徴をもつ事例だと考えられる。

そして他方で、断片1でのような歩行訓練士による教示は、通勤、通学などを想定した寄道が抑制された径路移動の歩行訓練プログラムでの、非日常的な地図の習得プロセスの特徴であると考えられる。断片1での教示では、歩行訓練士が視覚から引き出した知識を率先して提示する。提示する知識は視覚障害者がこれから経験することの予告である。予告をすることによって視覚障害者が重ねる経験を特定している。そして、特定された経験を重ねることによって引き出される知識もまた特定のなものとなる。つまり、断片1でのような教示とは、視覚障害者が他者の視覚から引き出す知識を歩行訓練士が特定することを通して、決められた径路エリアの知識と経験を集中的かつ組織的に関連づけることだと考えられる。

先に述べたように多くの歩行訓練場面では訓練士が率先する教示だけが一方的に連続的に行われているわけではなく、視覚障害者が率先して知識を要請する場面が混在している。これは、断片2の分析に見られたような地図を習得するプロセスが、生活エリアにおける日常的な移動の経験と晴眼者の視覚を利用した知識を関連づけることを基本として、既に視覚障害者の身につけているからだろう。そして、このような視覚障害者が身につけている日常的に地図を習得する方法を基本にして、断片1の分析に見られたような歩行訓練における教示活動が行われていることによって、効果的な地図の習得が

おこなわれていると考えられる。

4 まとめ

人は自分が目的地にむかって歩行していることを解説することができる。目的地に向かって実際に歩行移動をしているとき、また、街路等で歩行移動していたことを思い出しているときに、環境のなかの手がかりを用いて移動における曲がる位置や方向などを解説することができる。その意味で、歩行していることと環境の手がかりを用いてその歩行を解説できることは密接に関係していると考えられる。

歩行しているということは身体が環境のなかを移動し、事物や道や外気に触れ、同時にそれらを広がりの中で見て・聴くという身体運動と知覚経験の統合である。歩行していることは環境の事象についての経験のリアリティでもある。だから、環境から取り上げられた手がかりとなる事象を使って歩行を解説することは可能なだろう。しかし、このことは言語的、行動的に解説し、『よく理解している状態（既知状態）』になれば、歩行ができるということではない。なぜなら、言語的、行動的に解説すること自体が、歩行する行為による経験や記憶に依拠している行為だからである。実際に歩行をするという経験や歩行をしたという記憶そのものが、環境についての既知状態そのものを構成している。

地図を習得することもまた実際に歩行をするという経験や記憶そのものと密接に関係している。地図を習得するプロセスは歩行において知覚経験をすることを基本にした諸活動として考えなければならない。

多くの歩行訓練場面では、歩行訓練士が率先する教示だけが一方的に連続的に行われている

わけではなく、訓練によって違いがあるものの、視覚障害者が率先して知識を要請する場面が多く混在している。第2節での分析から、歩行訓練の教示活動では組織的に知識と経験を関連づけて経験のリアリティを集中的かつ組織的に構成しているように見える。しかし、地図を習得するプロセスとして、歩行訓練における歩行訓練士による教示活動だけでは十全なものとは言えそうにない。第3節での分析から、視覚障害者が日常的に実践して、身につけている基本的な地図を習得するプロセスがあると思われる。この基本的なプロセスは、視覚障害者が晴眼者の視覚を利用することで知識を引き出し、日常的に地図の習得し直しをしていることに共通していると考えられる。このような知識の引き出しは探求的で、視覚障害者が率先して知識を次々と引き出そうとする実践であると考えられる。集中的な経験のリアリティである歩行訓練での教示活動は、このような基本的な視覚障害者の実践と組み合わせられることによって有効になると考えられる。

日常の基本的な地図を習得するプロセスで、視覚障害者が晴眼者の視覚を利用していることはとても重要である。晴眼者の視覚を利用して直接的、間接的にさまざまな知識を引き出すことができる。それは、第一には知りたい周囲の事物についての直接的な質問とそれへの応答による知識である。第二には自身の経験をそれに重ねることによって、視覚的な景色がどのようなものかについての間接的な知識を引き出すことができる。そして、第三には、視覚から引き出した第一と第二の知識を基にして、視覚的な景色から知識を引き出すのではなく、自身が直接的に近づき・触れ・聴く知覚経験による知識の引き出しを行うことである。

そして、この第三の知識利用の契機となって

いるのは、晴眼者が視覚的な景色に知識を一貫して結びつける傾向があることによって、視覚から引き出される知識の限界が明らかになることだと考えられる。端的な言い方をすれば、視覚障害者からすると、晴眼者は視覚的な景色にあまりにも多くの知識を依存しすぎていると言われるべきなのかもしれない。このことは、視覚障害者自身に対して、近づき・触れ・聴くことができる景色の必要性を生じさせる。また、その実践を促す契機になっていると考えられる。

視覚障害者がどのような契機で視覚に結びついた知識を利用し、どのような契機でその知識の利用をしないか、もしくは、知識を引き出す方法の変更をいつどのようにして行っているかは重要だと考える。このことは、視覚障害者が歩行訓練を通して地図を習得することの効率や結果に影響していると考えられる。視覚障害者は知識と経験を関連づけるためのさまざまな方法をもっている。これには、予定ルートの変更、自身の身体配置の変更、手引きから白杖歩行への変更、歩行ルートのやり直し、過誤すること自体の利用などがあるように思われる。これらの方法は実践的に歩行訓練の地図の習得で用いられていると思われる。この詳細については今後の研究の課題としたい。

注

¹ 「未知状態にある事物、場所、地域等を触覚的聴覚的等さまざまな手がかりを用いて言語的、行動的に解説し、『よく理解している状態(既知状態)』にすること」(芝田 2007)

² 日本で歩行訓練士は資格化されていない。厚生労働省委託事業である日本ライトハウスの指導員養成課程と国立身体障害者リハビリテーションセンター学院の視覚障害生活訓練専門職

員養成課程で実施されている2年課程を終えた指導員が歩行訓練士とよばれて実務をしている。しかし、全国的に歩行訓練士が不足している現状から、歩行訓練士以外にも視覚支援学校の職員が歩行訓練をおこなうこともある(芝田2011)。視覚支援学校の教員や障害者支援施設の職員も日本ライトハウス(大阪)や京都ライトハウスでの実習において歩行訓練の指導を行っている。本論の事例では指導員が2年の専門課程を終えたかどうかではなく、実習生も含めて指導員をすべて訓練士として示した。また、指導実務経験を本文もしくは脚注に記している。

³ 障害者の目的と希望と能力に応じて策定される。本論の事例では専門の教育を受けた歩行訓練士が計画が策定した上で、断片1事例ではその訓練士が訓練の指導をおこない、断片2事例ではその訓練士の監督の下で実習生が指導をおこなっている。

⁴ 「私が現前にもっていると信じている事物が実際に存在していること、あるいは事物が、現出しているがままに存在していること、場合によっては私がこうしたことについて思い違いをしているということはある、…その事物は知覚的に現出しており、まさしくそのことを通じて、現出するものが存在しているかどうかという問いは、この事物は存在しているのだろうかという特定の問いとなるからである。」(Husserl 1910=2012)

⁵ 「行為の秩序性を生み出す土着の方法論は、社会秩序の生成を行う。または、自然な状況で組織された通常的活動の秩序性、略称すれば、ある活動自身の{自然な秩序性}を生み出す。この自然な秩序性が社会の諸活動のなかでいかにして人々によって生成されるか。これがエスノメソドロジーの研究の基本問題である。」(檜

村1998)

⁶ 「会話分析は、日常的な場面や制度的な場面で行われる会話が、社会的な合理性を含む事態の成立にとって基礎的な重要性をもつことをあきらかにしたといえる。作業研究はこの発想を推し進めて、自然な秩序性を生み出すための資源は、会話という形式を持つ発話交換組織だけには限られないと考える。…それらは、視線その他の身体、物質的道具あるいま記号的概念の使用などである。」(檜村1998)

⁷ 日本ライトハウスで歩行訓練士の専門教育を受けた後、京都ライトハウスにて訓練士の実務歴10年

⁸ 男性、撮影当時36才、18才まで先天性弱視であったが、以降は光覚弁(明暗のみ判別することが可能)となった。

⁹ 撮影日時:2013年2月13日午後2時ごろ
Video File.00001.MTS 20:44-20:52、00018.MTS 21:59-22:07、

¹⁰ 断片1での会話分析記号:「[」はこの発話位置で次行の「[」の発話が重なって開始されていること、「.」は音下がりの区切り、「,」平坦な区切り、「()」は明確でない聞き取り、「《 》」内は観察者による注記

¹¹ 図1左図は2016年1月10日、Google Mapsのearth地図より取得したものに筆者が矢印と事物名を描き加えた。Google Mapsの使用に関しては、学術利用であることからGoogleが定めるところの「フェアユース」の範囲内と考える。
<https://www.google.co.jp/permissions/geoguidelines/attr-guide.html>

¹² 本来は近似を表す数学記号であるが、ここではその形状のイメージだけを利用して、知識の上に別の知識を重ねることを表す記号として用いる。A≈Bは新たな知識Aを知識Bの上に重ねて知識を重ねることをしめす。

¹³ 西日本某県の視覚障害者支援施設の職員。
¹⁴ 男性、撮影当時 24 才。
¹⁵ 実習生による訓練には監督指導するベテランの訓練士が随伴する。3 週間前の 1 回目のときは監督役の訓練士が終始随伴していた。断片 2 は 2 回目の訓練開始直後である。指導役の訓練士が所用のためにまだ随伴していないが。すでに前回に同エリア、同実習生と同障害者による歩行訓練を行っていること、障害者自身が歩行には熟達していて不安がないことから、監督の訓練士が不在でも訓練を開始しておくことが、障害者、訓練士、実習生の三者で予め前回の終了時に了解されていた。

¹⁶ 撮影日時：2013 年 11 月 22 日の午後 4 時ごろ Video File.00001MTS 02:18-05:12、00054.MTS 00:48-03:42, GOPR0084.MP4 03:21-06:15.

¹⁷ 断片 2 での会話分析記号：「[」は発話位置で次行の「[」の発話が重なって開始されていること、「: : :」は音の引き延ばし、「(0.4)」は 0.4 秒の沈黙、「?」は音の上昇、「/」は疑問でない音の上昇、「h」は呼気、「()」は括弧内が未確定、「.」は音下がりの区切り、「,」平坦な区切り、「¥ ¥」は笑いながらの発話、「> <」は発話スピードが速い、「° °」は発話が小声、「《 》」内は観察者による注記

文献

- Wiener, William R., Richard L. Welsh, and Bruce B. Blasch, (eds.), 2010, *Foundations of Orientation and Mobility, Third Edition: Volume II Instructional Strategies and Practical Applications*, American Foundation for the Blind Inc.
- 坂本洋一, 2007, 『視覚障害リハビリテーション概論』中央法規出版.
- 芝田裕一, 2012, 『視覚障害児・者の理解と支援』北大路書房.
- , 2011, 『視覚障害児・者の歩行指導』北大路書房, 203-89.
- Psathas, George, 1986, "Some Sequential Structures in Direction-giving," *Human Studies*, 9(2-3): 231-46.
- , 1990, *Direction-Giving in Interaction*. Réseaux, Hors Série 8 n°1, 183-98.
- , 1992, "The Study of Extended sequences: the Case of the Garden Lesson," Watson, Graham and Robert M. Seiler (eds.), *Text in Context: Contributions to Ethnomethodology*, New-bury Park: Sage, 99-122.
- Psathas, George and Martin Kozloff, 1976, "The Structure of Directions," *Semiotica*, 17(2): 111-30.
- Haddington, Pentti, Lorenza Mondada, and Maurice Nevile, (eds.), 2013, *Interaction and Mobility: Language and The Body in Motion*, De Gruyter.
- Hester, Stephen, and David Francis. 2003, "Analyzing Visually Available Mundane Order: a Walk to the Supermarket," *Visual Studies*, 18(1): 36-46.
- 山本利和・芝田裕一・増井幸恵, 1994, 「白杖歩行者が求める空間情報に関する調査」『視覚障害リハビリテーション』40: 12-3.
- 浜渦辰二・山口一郎監訳, 2012, 『間主観性の現象学その方法 エドムント・フッサール』筑摩書房.
- 櫻村志郎, 1998, 「エスノメソロジーとは何か?」『日本ファジィ学会誌』10(1): 2-10.
- 秋谷直矩・佐藤貴宣・吉村雅樹, 2013, 「社会行為としての歩行——歩行訓練における環境構造化実践のエスノメソロジー研究」『認知科学』21(2): 213-24.

(よしむら まさき (株) グッドビレッジ yoshimura.masaki@gaia.conet.ne.jp)
(あきや なおのり 山口大学国際総合科学部 akiya0427@gmail.com)
(さとう たかのり 大阪市立大学都市文化研究センター rinokata@s9.dion.ne.jp)
(査読者 檜村志郎 檜田美雄)

Acquisition Process of Map-Information in Orientation and Mobility for Blinds:

Ethnomethodology on Street-Walking Training Sessions for Visually Impaired Persons

Masaki YOSHIMURA, Naonori AKIYA, and Takanori SATO

The purpose of this study is finding the process of changing the map-information to more practical and applicable knowledge for the life of visually impaired persons through the street-walking session, which is performed by them and the specialists. The walking is defined in the leading text book “Foundations of Orientations and Mobility” as proficiency in orientation and mobility. Visually impaired persons’ life with voluntary and independent travel by walking is subjects to varying environmental conditions. The closer relations with the environment (familiarization) is said to be indispensable. By analyzing gestural actions and conversations in O&M as the street-walking session, we would like to make clear how the visually impaired persons attain map-information of frequently varying environmental conditions.